

# 東京音楽大学リポジトリ

## Tokyo College of Music Repository

F・ベルヴァルトの生涯における諸業績と音楽活動(2)  
): 多彩な仕事と恵まれない評価の狭間で

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2002-12-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/816">https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/816</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## F・ベルヴァルトの生涯における諸業績と音楽活動（2）

——多彩な仕事と恵まれない評価の狭間で——

本 間 晴 樹

### 1. 第2部の序

前稿では、ヴァイオリン奏者としてスウェーデンの音楽界に登場したフランツ・ベルヴァルトが、作曲の道に専念するに至るまでを取り上げた。本稿は、それに引き続き、最初のウィーン滞在からの帰国以来、彼が展開する作曲及び音楽教育等の活動の諸局面について考察する。前稿でも触れた通り、ベルヴァルトの仕事を評価する者としめない者のギャップは、彼の音楽界における存在を常に危ういものにしてきたが、そのギャップは一層大きなものとなり、困難をもたらすようになる。一方、本稿で取り上げる範囲においても、音楽と異なる領域での彼の活動は、無視できない重要性を持っている。以上のような側面に留意しながら、後世スウェーデン最大の作曲家とされたベルヴァルトの、現実に生きた社会人・芸術家としての実体を明らかにするのが、この研究の目的である。

### 2. 作曲への専心

1842年にウィーンから帰国して以後、再び外国に旅立つまでの約4年間、ベルヴァルトはストックホルム乃至その近郊に住んで、音楽活動、主に作曲に取り組んでいる。この時期は彼の生涯でも特に、作曲に関しては充実した時期となった。

ベルヴァルトの作品群の中で、最も世に出やすかったのは、様々な機会や催事に合わせての音楽、それも主に王室絡みのものであった。1843年2月、国王カール14世ヨハンの在位25周年の記念行事が行われたが、その際ベルヴァルトは、『オーケストラの為のポロネーズ』を発表している。翌1844年3月、カール14世は81才の高齢で没し、唯一の息子オスカルが後を継いで国王オスカル1世となった。長年愛顧を被っていた王太子オスカルが国王になったことは、ベルヴァルトにとって望ましいことには違いなかったが、彼の立場がこれで著しく有利になることはなかった。オスカルとしては、国王になった以上、露骨な肩入れが一層やりにくくなったとも言えるだろう。とにかく、この年の7月4日即ちオスカルの誕生日の祝典に、ベルヴァルトはインゲルマン (C.G. Ingelman) の詩に作曲した賛歌『オスカル国王! (Konung

Oscar!)』を捧げている。45年には、過去の国王を称える主旨の作品を2曲、即ち4人のテノールと管楽アンサンブルの為の『国王カール12世のナルヴァにおける勝利 (Konung Karl XII: s Seger vid Narva)』、それにインゲルマンの作詞による7楽章からなるカンタータ『グスタフ・アドルフ大王のリュッツェンにおける勝利と死 (Gustaf Adolf den Stores Seger och Död vid Lützen)』を作っている。この種の曲は、発表機会を得やすく、彼の収入の足しにはなったかもしれないが、繰り返し演奏されることは期待できず、後世には殆ど忘れられた存在である。

この時期の彼の作品には、他にも声楽曲がある。例えば、オラトリオ『イェルサレムへの道 (Der Zug nach Jerusarem)』を作る計画は途中で挫折したが、その中の1曲『聖墓における巡礼の祈り (Gebet der Pilger am heiligen Grabe)』<sup>(1)</sup> (男声四重唱) だけは1844年に一応完成している。また、整形医学の活動を通して親しくなった医師ヘルマン・セーテルベルイ (Herman Satherberg) の作詞で、『スウェーデン民衆の歌 (Svensk Folksång)』を1844年に作り、また北欧の神話・伝説を素材にした、全6部からなる歌曲『北欧の幻想的絵画 (Nordiska Fantasie-bilder)』を1846年に作っている。概して、民族的色彩を帯びたものが多いのは、若い頃からの彼の持ち前ではあるが、時代の風潮がそれを更に強めたとも言えるだろう。

同じ頃、彼の作品中の精華というべき交響曲群も作られていた。まず、交響曲ト短調または『深刻な交響曲 (Sinfonie sérieuse)』(或いは第1番)、次いで交響曲ニ長調または『諸謔的な交響曲 (Sinfonie capricieuse)』(或いは第2番) が1842年に完成している。その後1845年には、交響曲ハ長調または『風変わりな交響曲 (Sinfonie singulière)』(或いは第3番) と交響曲変ホ長調 (或いは第4番) も作られている。なお、この各曲の標題は、ベルヴァルト自身が付けたものであり、最後の第4番にも、一旦は『純真な交響曲 (Sinfonie naïve)』との名が付けられたが、後に彼自身の手で抹消されている。以上のうち、ト短調の交響曲 (第1番) は、1843年12月2日にオペラ座において、従兄のヨハン・フレドリクの指揮で初演されたが、他の曲はいずれも、作者の生前には演奏されていない。交響曲ニ長調 (第2番) に至っては、1842年6月に書き上げられたとされる総譜が<sup>(2)</sup>、写譜もされず印刷もされないまま紛失して、現存していない。現在演奏されている交響曲ニ長調は、20世紀にスケッチから復元されたものである<sup>(3)</sup>。ロマン派の作曲家の多くと同じくベルヴァルトも、自分の作曲技法を多面的にしかも集中的に発揮してみる手段として、交響曲の創作には大いに力を入れた。その結果、この四つの交響曲は、最も彼の特徴がよく現れている作品として、現在では高く評価されている。しかし、同時代の人々に顧みられなかったのは、必ずしも曲に対する嗜好によるものとは言えず、上記の通りそもそも演奏機会が得られなかったのである。

交響曲と並んで、ベルヴァルトが作曲家としての生命を賭けた分野に、劇場音楽がある。前稿で述べたように、以前から多くの題材に作曲を試みては断念・放棄してきた彼は、ウィーンで出会ったプレヒトラーの脚本に興味を覚え、外国滞在中から『エストレラ・デ・ソリア (Estrella de Soria)』の作曲に取り組んできた。この作品は、ウィーンから帰国した時に、既

に完成していたとも言われるが、その後も手を加えられ、現存する形になったのは1848年であるとする見解が有力である。このオペラに関しては、帰国直後の1842年4月のスウェーデンの新聞に、「近日ウィーンで初公演の予定」という記事が出たが、全くの虚報であり、そのような事実はなかった。とにかく、これが上演されるのはかなり後のことであった（後述）。

大作のオペラを発表する意欲は持ち続けながら、その実現が困難なのを感じて、彼はより小規模で上演が容易と思われるオペレッテ（opereette：いわゆる『オペレッタ』ではなく『歌芝居』<sup>ジグジュピール</sup>の類い）を、脚本も自分の手によって書きながら、世に出すことを試みた。その第1作『修道院へ参ります（Jag går i kloster）』（全2幕）は、1842年の10月に完成し、その年12月のコンサートでアリアと二重唱の一部が披露されたが、全幕通しての初演は、1843年12月にオペラ座で、交響曲ト短調の初演に引き続いてであった。主役のジュリーを歌ったのは、パリ留学から帰国したばかりで、世界的名声を築き始めていたジェニー・リンド（Jenny Lind）<sup>(4)</sup>であった。しかしこれは、5回の公演の末にレパトリーから外され、舞台から姿を消した。音楽の方の評判は悪くなく、個々の歌はその後のコンサートで取り上げられることもあったが、脚本の不出来は救えなかったのである。続いて、1843年にやはり自分の脚本に作曲した『モード商人（Modehandelskan）』（全3幕）が、1845年3月に初演されたが、この1回限りに終り、二度と上演されることはなかった。前作同様、脚本の弱さが致命的であった。

意欲的に作曲を続ける傍ら、より直接収入を得る手段として、彼は演奏会の開催にも努めたが、概して収益は心細いものであった。それは、前記のように交響曲ト短調と『修道院へ参ります』を初演した、1843年12月2日の演奏会でも同様であった。1844年11月19日に、前述の民族的傾向の声楽曲のうち三つを中心に据えて、大教会で催した演奏会では、珍しく多数の聴衆が訪れ、2000リクスダレルの収入を彼にもたらしたが、これは例外であった<sup>(5)</sup>。

熱心な音楽への取組みにも拘らず、社会的地位や経済状況をなかなか改善できないのに悩んだベルヴァルトは、再び国外で活動することを望むようになった。1845年8月、彼は国王オスカル1世に会って外国行きの希望を口頭で伝え、9月にはフランスとドイツで研究に従事する為の費用下賜の申請書を正式に提出した。それによると、その目的には音楽教育の向上、また「麻痺状態にある」音楽アカデミーの再生の為の研究も含まれることになっていた。オスカル1世は、今回も自分では決定を下さず、音楽アカデミーに判断を委ねた。ところが、申請書に記された厳しい批評に心証を害したアカデミーは、ベルヴァルトの弟子ファン・ボーム等の抗議を退け、これを却下した。しかし、既にスウェーデンを出る決意を固めていた彼は、自力で準備にとりかかった。この状況で、彼の計画を支えたのは、1842年の帰国以来新たに彼の交友範囲に加わった、音楽好きの貿易商や工場主等の富裕な市民達、アルブレクト・ヴァリス（Albrekt Wallis）、ヴェンベルイ（C.A. Wennberg）、ヘンリク・ケンペ（Henrik Kempe）、ルドヴィク・ペトレ（Ludvig Petre）等であった。特に、材木商であるヴェンベルイは、ベルヴァルトがフランスの木材取り引き事情を通報する、と言う条件で、資金援助を約したと言われる<sup>(6)</sup>。その他にも、彼は1845年11月11日と1846年5月9日の大教会での演奏会で、やや良

好な収益を手にする事ができた。彼がストックホルムを出発したのは、後者の演奏会から間もなくのことであった。

### 3. パリ及びウィーンでの活動

外国への出発に当たって、ベルヴァルトは妻マティルデを後に残して来た。これは、フランスへ行く途中南スウェーデン、デンマーク、北ドイツ等で、機会をとらえて演奏会を開くつもりがあったので、身軽に動けるようにとの考慮だったと思われる。実際、イエテボリイでは5月28日に、大聖堂で演奏会を開くことができた。同じようなことをコペンハーゲン、リュベック、ハンブルクでも企てたが、結局不調に終わった。彼はイエニー・リンドが共演してくれることを期待していたらしいが、彼女は北ドイツからウィーンに去った後だったのである。遅れて旅立ったマティルデと、7月12日にリュベックで合流してから、二人は旅を続け、7月24日にパリに着いた。

出国に先立ち、ベルヴァルトは旧知のフランス駐在大使グスタフ・レーヴェンヒェルム(Gustaf Löwenhielm)<sup>(7)</sup>伯爵と連絡を取って助力を請い、4月末には楽譜その他の荷物を、レーヴェンヒェルム宛てに発送している。パリに到着後、レーヴェンヒェルムはベルリン滞在当时のブレンデル公使に劣らず、好意的にベルヴァルトの後ろ盾を引き受け、彼等夫婦を食事に招き、またパリ楽壇との接触を取り持ちなどしてくれた。フランスの音楽界では、ベルヴァルトはフロマンタル・アレヴィ、フランソワ・オーベール等と知己を得ることができた。この1846年の末には、彼はパリを離れてウィーンに行ってしまうが、マティルデはなおパリに残り、レーヴェンヒェルムと共に、彼の交響曲をコンセルヴァトアールの演奏会で取り上げさせるべく奔走している。結果的に、パリでは思うようには演奏会が開けなかったが、その主な原因は、やがて1848年の2月革命に向かって増大していく、社会不安にあった。

彼が年末にウィーンに移ったのは、パリに見限りをつけた訳ではなく、恐らく夫婦協力して、両方の町で成功を収める為であった。しかし、演奏会はウィーンにおいての方が順調に実現できた。前回の経験があったこともあり、ウィーンのマスコミも彼を取り上げてくれたし、また、イエニー・リンドの協力が得られた為もあった。1847年1月27日、アン・デア・ウィーン劇場で、彼自身の指揮により行われた演奏会では、以前にもウィーンで紹介されたことのある『ノルウェーの山の思い出』、『妖精の戯れ』に加え、『聖墓における巡礼の祈り』と『スウェーデンの兵士の歌 (Schwedisches Soldatenlied : 「ナルヴァにおけるカール12世の勝利」のこと)』が演奏され、更に、プレヒトラーの脚本に作曲した最新作のオペレッテ『スウェーデンの田舎の婚約式 (Ein ländliches Verlobungsfest in Schweden)』が、リンドの主演によって上演された。この演奏会は一般にはかなり好評で、収益も一応良かった。しかし、企画の貧しさや練習不足を指摘する批評も見られ、ベルヴァルトにとっても不本意な出来栄であった。

この演奏会の後、3月にベルヴァルトはウィーンのすぐ北にあるライゼンベルク城を訪れ、城主であるカール・フォン・ライヘンバッハ男爵の客として、ここに数か月間滞在することにした。彼とこの一家の関係、滞在の目的等には不明な点が多いが、男爵の娘達にピアノを教えながら、次の演奏会の準備に当たっていたと考えられる。

11月、彼は演奏旅行の為、ウィーン近郊から旅立った。12月3日にまずリンツで、12月21日と28日にザルツブルクで、更に1848年が明けてまもなくニュルンベルクで、彼の指揮による演奏会が開かれた。曲目としては、『妖精の戯れ』、『モード商人』の中のアリア等、彼の作品の中の小品に加え、いずれの場合も『スウェーデンの田舎の婚約式』が、勿論リンド主演ではないが、中心に据えられた。これらの演奏会では、ひとまず旅行の続行を可能にする程度の成功は、収めたようである。この間、12月27日に、彼はザルツブルクのモーツァルテウムから、名誉会員の称号を送られた。彼の音楽活動への評価であると共に、彼のモーツァルトへの傾倒振りに対する感謝の表れでもあった。音楽に関して、彼が何らかの公的なタイトルを得たのは、宮廷楽団を辞めて以来初めてであった。

引き続き彼は、次の演奏会を開くつもりでミュンヘンを訪れたが、当時この町では、バイエルン国王ルートヴィヒ1世に対する市民の不满が不穏な情勢を生み出していて、演奏会開催はおぼつかない状況であった。2月末、パリでは2月革命が勃発して王制が倒され、社会の動揺が著しく、これまでマティルデが実現に努力して来た、ベルヴァルトの作品の演奏会は、到底不可能となった。それに、マティルデがこの上パリで一人暮らしを続けるのは、不適當な情勢になってきた。彼女は3月16日にパリを離れ、23日にザルツブルクでベルヴァルトと再会した。既にウィーンでもベルリンでも革命が始まっていたが、ザルツブルクは一応は平穩であった。4月11日に、彼はザルツブルクの市役所ホールで、『ノルウェーの山の思い出』と『スウェーデンの田舎の婚約式』を中心にした演奏会を開いている。

演奏旅行の継続を諦めたベルヴァルトは、ウィーンに戻ることにしたが、革命後の政情不安が続き、戻っても音楽活動の再開はまだ望めない状況であった。前年滞在したライヘンバッハ男爵家では、この頃家庭内にトラブルが生じ、訪問するのは遠慮せざるを得なかった。彼の、この時期の生活に付いて、詳しいことは不明だが、収入の道を閉ざされ、苦しかったことは確かである。多分この年の夏から、彼等夫婦は、ウィーンの南の郊外エードにある、事業家で音楽ファンのマテウス・フォン・ロストホルン男爵の邸宅に逗留することができた<sup>(8)</sup>。ここには、他にもスウェーデン人の滞在客がいた模様である。11月6日早朝、マティルデはロストホルン家で、男の子を出産した。子供は15日に洗礼を受けて、ヤルマル・アルムレーヴ (Hjalmar Almlöf) と命名された。ベルヴァルトにとって唯一の子供である<sup>(9)</sup>。

11月にウィーンでは、政府軍が革命を鎮圧してひとまず治安を回復したが、なお社会不安は去らず、国際情勢は更に緊迫して来たので<sup>(10)</sup>、家族が増えて生活に一層窮したベルヴァルトは、帰国を考えるようになった。折しも1848年12月、 Upsala 大学の音楽監督ヨハン・ノルドブロム (Johan Nordblom)<sup>(11)</sup> が亡くなったという知らせが入ったので、1849年1月19日、彼

は国王オスカル1世に宛て、音楽監督の後任になりたい意向を書き送り、2月3日には大学宛てに正式の願書を送った。これに対する回答はなかなか得られなかったが、3月24日には、彼は更に国王に対し、彼が陥っている窮状を訴えて、帰国の為の援助を要請した。その返事も来なかったため、彼はウィーン駐在公使のホックシルト (C. Hochschild)<sup>(12)</sup> 男爵から旅費を立て替えてもらって、5月にスウェーデンへの旅に向かった。途中リュベックに着いたところで、国王オスカルからの援助金と、ウプサラ大学の音楽監督にヤコブ・アクセル・ヨセフソン (Jacob Axel Josephson)<sup>(13)</sup> が選ばれたとの知らせが届いた。大学側は、ピアノと指揮において余り熟達していないベルヴァルトを、監督に相応しいとは認めなかったのである。彼の2度目の長期外国滞在は、様々な体験を提供したものの、作曲・演奏の面については、十分な成果をもたらさずに終わってしまった。

#### 4. 工場経営と音楽

ベルヴァルトがスウェーデンに戻って間もない6月、彼の従兄のヨハン・フレドリクが、宮廷楽長の職を退いた。その後任の座を狙って、彼が積極的に動いたというのが通説になっているが、その確証はない。ただ、彼がこの地位を望んだとしても不思議はない。しかし、後任の楽長になったのは、イタリア系の若い指揮者ヤコポ・フォローニ<sup>(14)</sup>であった。

意のままにならないことの多い日々ではあったが、この前後の時期、作曲は意欲的に進めている。彼が最初のピアノ三重奏を書いたのは1845年とされているが、この曲は出版されず、改めて第1番と命名されたピアノ三重奏 (変ホ長調) が、1849年に発表された。続いて第2番から第4番までの3曲 (ヘ短調、ニ短調、ハ長調) が、1851年までに作られている。弦楽四重奏 変ホ長調とイ短調の2曲も、49年の作である。1849年にはまた、オルガン伴奏によるカンタータ『グスタフ・ヴァサのダーラナへの旅 (Gustaf Vasas färd till Dalarna)』も作られた。これは、全10楽章からなり、スウェーデン史上の有名な事件を取り上げた民族的素材の曲で、作詞はセーテルベルイであった。この曲は、直ちに公開演奏する企画があったが、実現に至らず、初演は16年後のことになる。

1850年3月、ベルヴァルトはまた短期間、ウィーンへ出掛けている。何の為かは不明だが、前回の滞在中に生じた雑務の為か、或いは姉妹達の仕事と関係があったのかもしれない。彼の姉妹は皆、独身のまま父の残した家に住んでいたため、生活を支える為に、彼女達は1850年から、帽子製造の工房を始めることにしたのであった。ベルヴァルトもこれに色々と手を貸したが、ウィーンから職工を招くに当たっても、彼が世話を焼いた可能性がある。すぐ上の姉のカロリーネを責任者としたこの帽子工房は、うまく軌道に乗り、常時3—4人の女性を雇って仕事をこなすようになった。

同じ頃、彼にとっても職業上の転機が訪れた。スウェーデン北部の、オンゲルマン川の河口近く、ヘルネーサンド市から約30kmの距離にあるサンデー (Sandö) と呼ばれる中洲に、

1750年設立というガラス工場があった<sup>(15)</sup>。これが、1840年代に経営不振に陥って所有者が転々と変わり、1850年6月には、ベルヴァルトの知人の事業家ペトレの手に入った。ペトレは、この工場を獲得すると、直ちにベルヴァルトに対し、工場長の職を引き受けるよう勧めたのである。ベルヴァルトは、かねがね経済活動に関心を持っていたし、自分の経済状態が楽でないこともあり、フルタイムの勤務ではないということで、喜んで引き受けた。即ち、彼はその後、毎年春から秋までのほぼ半年間サンデーで工場経営に従事し、冬を含む半年はストックホルムで音楽に専念することにしたのである。1852年5月、ペトレは34才の若さで急死したが、その後この工場の所有者になったのは、やはりベルヴァルトの知人で音楽ファンの、ヴァリスであった。1853年1月、ヴァリスはベルヴァルトとの間に、改めて雇用契約書を交わした。その内容は、(1) ベルヴァルトはこれまで通り、春から秋までの半年間、工場の管理経営に当たる、(2) ベルヴァルトの年俸は1200リクスダレル、及び工場の純益の4分の1とする、(3) サンデーには、工場側の負担でベルヴァルトの住居が用意される、(4) スtockホルムとサンデーの間を行き来する交通費は工場側が負担する、(5) 契約は1858年6月まで有効とし、それ以前に工場側から解約する場合は、彼に2000リクスダレルが支払われる、等という、彼にとって実に都合の良いものであった。ペトレもヴァリスも、彼の経営手腕にどの程度期待していたかは不明だが、安定した収入の下で音楽に打ち込むことには期待していたのではなかろうか。有利な条件のお陰で、ベルリンの整形外科研究所の時とは違い、工場長在任中の彼は、音楽活動を途切れさせることはなかった。

鉄道のまだ通じていなかった当時、ストックホルムとサンデーの間の旅は、馬車と船とを乗り継いで通常7日間を要した。1851年以後、彼はサンデーへ赴任する時は、妻と息子を連れていった。サンデーには1765年以来、所有者及び管理者の為の邸宅が立てられていたが、ベルヴァルトは自分の負担でそれに建て増しをさせた。その部分には広いサロンがあり、そこでコンサートを催すことができた。

工場から離れている冬の半年間、彼は自分の作曲に従事するだけでなく、音楽を志す若い世代の人々を教育し、彼等と交流することができた。1850年頃から彼と接触するようになった音楽家には、オスカル・ビュストレーム (Oscar Byström)<sup>(16)</sup>、イヴァール・ハルストレーム (Ivar Hallström)<sup>(17)</sup>、アウグスト・エーランデル (August Ölander)<sup>(18)</sup>、ルドヴィク・ノルマン (Ludvig Norman)<sup>(19)</sup>、ヒルダ・テーゲルストレーム (Hilda Thegerström)<sup>(20)</sup> 等がいる。彼等の中で最も親しい関係を結んだのは、恐らくビュストレームだが、ヒルダ・テーゲルストレームも、ベルヴァルトの指導を受けたことを、一生を通じて感謝し、誇りにしていた。彼女は、元々ファン・ボームの弟子としてピアノを学んでいたが、後にベルヴァルトが、家計の苦しい実家から彼女を引き取り、自宅に住ませて物心両面の世話をし、1856年にパリのアントワーヌ・マルモンテルの下へ、1857年にはワイマルのフランツ・リストの下へ弟子入りさせている。彼女を介して、ベルヴァルトとリストは文通によってだが親しくなっている<sup>(21)</sup>。しかし、彼女に対する扱いを巡って、ベルヴァルトは30年来の友人ファン・ボームと1856年に絶交する



ことになる<sup>(22)</sup>。いずれにせよ、こうした若い音楽家達、それにアマチュア音楽家のペトレ夫人やヴァリス夫人が頻繁に訪ねて来た為、ベルヴァルトの家ではしばしば小さな演奏会が催され、それは彼の創造力や活力に、有益な刺激を与えたと思われる。

1850年代は一方で、ベルヴァルトにとって、評論家として頻繁に筆を取り、その彼の文章がさかんに公表された時期でもあった。全国夕刊新聞「アフンブラデット」紙等を発表の場として、彼はかなり多様な事柄について論じ、それは例えば、借家人の権利、労働者住宅の建設、森林資源の浪費への警告等にまで広がっていた。また、往年の経験を生かして、整形外科体操について論じることもあった。しかし当然中心になるのは音楽に関してであり、例えば1856年のオペラ座におけるモーツァルト生誕百周年記念の『ドン・ジョヴァンニ』の公演を酷評し、ベートーヴェンの『フィデリオ』をオペラ座のレパートリーに入れることを主張し、また若手作曲家の作品を褒め上げる、といった事柄に筆が振るわれた。これはある意味で、敵を増やし、音楽界の中枢から自分を遠ざける行為でもあった。

音楽だけでなく、工場経営にもベルヴァルトは彼なりに打ち込んだ。彼の工場長時代のサンデー工場が、特に高収益でなかったことは判明しているし、彼の在任の末期には経営危機が生じたことも知られている。しかし、この工場はこれ以前もこれ以後も、度々の経営危機に遭遇していることを考慮すれば、あながちベルヴァルトが不適任であったともいえない<sup>(23)</sup>。彼はサンデーにいる間に、ガラス吹きの技術を習得し、自らグラスや水差しを作って、家族の使用に供したこともある模様である。経営上彼のイニシアティブで行われたことを探すと、まずサンデーの島に、1853年製材工場を設立したことが上げられる。元々製材業は、事業の中でも彼が特に興味を持っていた分野であった。また、同じ頃あるドイツ人が、この島でビール工場を始めたのに注目し、その需要に応じてビール壺の製造を拡大した。本来板ガラスの生産を主としていたサンデー・ガラス工場の歴史で、ベルヴァルトの在任中だけガラス壺の生産が極めて多い<sup>(24)</sup>。

サンデーの工場に関して、最初は緊密な協力関係にあったヴァリスとベルヴァルトの間には、次第に摩擦が生じるようになった、始めは、二人のどちらかが強引に押し進めたことが、もう一方の気に障っていた程度だったようだが、1857年、経済情勢の悪化に伴って経営も苦しくなると、それは一層深刻なものになった。結局1857年の秋が過ぎると、ベルヴァルトは二度とサンデーには赴かず、ヴァリスも彼を行かせようとはしなかった。契約の中途破棄に対する違約金は、どちらも払った様子がない。

サンデーから去っても、ベルヴァルトは事業家としての活動から退く気はまだなかった。1857年のうちに、ストックホルムのすぐ西にあるサンドヴィクのガラス工場から、彼を工場長として招くという話があり、翌1858年始めには契約が結ばれ、彼は直ちに、熟練工の募集の為にベルリンに出張している。このベルリン旅行では、彼はハンス・フォン・ビューロウと会う機会を得ている。しかし、この工場の経営も思わしくなく、工場側が契約条件を実行できないことが判明してきたので、1859年春、契約は解消された。

それでも、事業に賭けた彼の夢は醒めなかった。1860年、ベルヴァルトはストックホルムの中心近くに煉瓦工場を立てる計画を練り、土地も買収した。この当時、労働者や小市民の為の住宅建設は、次第に活発化しつつあり、着想は決して悪くなかった。しかし、事前の研究と資金の不足から、これはついに実現に至らず、1861年工場予定地の売却で一切は終わった。

事業に係わるトラブルは、ベルヴァルト自身の起こしたことだけでは済まなかった。彼の若い友人で弟子でもあるビュストレームは、1850年代にゴットランド島にセメント工場を設立し、ベルヴァルトもこの事業に3000リクスダレ以上を投資している。しかし、1857—58年の不況によりこの工場は倒産し、後始末はビュストレームの義兄のメレルステン（Möllersten）とベルヴァルトが引き受ける羽目になった。尤も、こんなことがあっても、彼はビュストレームとは、最後まで親しい友人関係を続けている。

## 5. グランド・オペラ

1859年、ベルヴァルトは知人の声楽家アデライド・レフーセン（Adelaide Leuhusen）男爵夫人から、スモーランドの貧困家庭出身の、16才の少女クリスティナ・ニルソン（Kristina Nilsson）を、ヴァイオリンの弟子として預けられた。彼はヒルダ・テーゲルストレームの場合と同様、彼女を自宅に住ませ、生活を全面的に支えながら、ヴァイオリンだけでなくピアノと声楽も教えた。しかし、間もなく彼女の最も秀でた分野は声楽とわかり、これに力を入れるようになった。彼は1860年2月、市の中心にあるホールで、クリスティナの歌手としての初の演奏会を、ちょうどワイマルから帰国していたヒルダのピアノとの共演によって催した。この年の秋、ベルヴァルトは本格的な声楽の修行の為、クリスティナをパリに送り出す。4年後、彼女はパリでデビューし、その後華々しい成功を収め続ける。しかし、彼女がベルヴァルトと再会することは、ついになかった。

1861年にベルヴァルトが、煉瓦工場や事業一般に対する関心を減じたのは、一つには、この年初めに、彼のオペラ『エストレラ・デ・ソリア』を、秋にオペラ座で上演するという企画が持ち上がってきた為であった。オーストリアの詩人プレヒトラーの脚本による、15世紀のスペインを舞台にした恋愛悲劇であるこの作品は、前述の通り1842年4月に初演との虚報が流れたまま、1840—50年代を通じて上演が実現する見通しはなく、ウィーンで上演しようとする企ても徒労に終わっていた。それが、この頃になって急に実現に近付いたのは、彼の弟子や友人達の影響力が利いてきたこともあるが、また1861年にオペラ座総監督に就任したエウシェーネ・フォン・ステディンク（Eugène von Stedingk）が、スウェーデン人の作品をより多く取り上げる路線を、採用した為でもあった。

上演と決まっても、故障が多くて予定通りには行かず、1861年中の上演は実現せず、1862年3月に延期されたのがまた延ばされ、ようやく初演に漕ぎ着けたのは、オペラシーズンも末期の1862年4月9日で、指揮はルドヴィク・ノルマンが担当した。批評は、音楽に対しては概し

て好意的で、ワーグナーのいわゆる未来音楽に代表されるような音楽の新しい方向性が、20年前に「既にベルヴァルト氏によって先取りされていた」と書いた記事も現れた<sup>(25)</sup>。しかし、脚本と演出に関しては、特にその冗長さには、厳しい批評が多かった。いずれにせよ、この作品はオペラ座のレパートリーに定着することができなかった。シーズンの終わる5月までに、更に4回の公演があっただけで、秋に始まる次のシーズンには、もはや演目に残ってなくて、作者の生前には上演されることがなかった。

ともあれ、『エストレラ・デ・ソリア』の上演が実現したことは、ベルヴァルトのオペラに対する意欲を再燃させ、1863年には彼が次のオペラに取り組んでいることが、新聞にも報道されている。彼がこの時選んだ題材は、ウォルター・スコットの小説もしくはフリードリヒ・シラーの戯曲を元にした、16世紀のスコットランドの女王メアリ・ステュアートを主人公とする史劇で、タイトルも『ロッホレーヴンの城 (Slottet Lochleven)』と決まっていた。しかし、この企ては翌年には放棄され、彼は全く別の作品に取り組んでいる。新しい素材は、18世紀フランスのスタニスラス・ブーフレルの原作による『ゴルコンダの女王アリーヌ』であった。エキゾチックな冒険ロマンとでもいふべきこの物語は、既に1776年にフランチェスコ・ウッティーニ<sup>(26)</sup>がスウェーデン語でオペラに仕立てているし、他にもボイエルデュー、ドニゼッティ等、少なくとも6-7人の作曲家によってオペラ化されている。この原作には、脚本が何種類か作られているが、ベルヴァルトが取り上げたのは、J・B・C・ヴィアルとE・G・F・ド・ファヴィエールによる脚本で、原作の中間の一部だけを膨らませたものであった。オペラ『ゴルコンダの女王 (Drottningen av Golconda)』は、ひとまず1864年中に完成したが、『ロッホレーヴンの城』からかなりの量の曲が使い回されていた。また、やはり脚本の不安を指摘されて、1865年になっても手を加え続けていた様子である。オペラ座総監督のステディンクは、この新作に興味を示してくれたが、上演の機会には恵まれず、結局作者の死に至るまで上演されないままであった<sup>(27)</sup>。

ベルヴァルトが『ロッホレーヴンの城』を捨てて『ゴルコンダの女王』に取り組んだ主な理由は、後者の主演アリーヌの役を、クリスティナ・ニルソンに歌わせたいと望んだからであった。クリスティナはパリに行って以来進境著しく、1864年10月にリリック座において、『椿姫』のヴィオレッタ役でデビューを果たし、その後『魔笛』の夜の女王、『ファウスト』のマルグリット等の大役を次々にものにし、イエニー・リンドの再来と騒がれていた。ベルヴァルトは1864年から、彼女に宛てて何度か手紙を送り、成功を祝福すると共に忠告・苦言も呈している。1865年初めの手紙では、『ゴルコンダの女王』のアリーヌのパートは総て彼女のために書いたことを告げ、是非歌ってくれるよう頼んでもいる。クリスティナは、最初のうちは返事を書いてしたが、単に煩わしくなったのか、それともベルヴァルトの意向が彼女の意思に反していたのか、やがて返事を出さなくなってしまった。ベルヴァルトは、返事を空しく待ちながらなお数回手紙を送り、結局諦めた。クリスティナは、1865年の夏に一時帰郷した際も、ベルヴァルトには知らせず、会いもしなかった<sup>(28)</sup>。

1864年初め、20年来何度も問題にされてきた、ベルヴァルトの音楽アカデミー入りがようやく実現している<sup>(29)</sup>。これは、一つには弟のアウグストや、彼の若い友人達の影響力が強まってきたことにもよるが、一説によれば、彼のアカデミーに対する辛辣な論評に耐えかねた会員達が、彼を沈黙させる為にメンバーに入れたのだとされている<sup>(30)</sup>。勿論ベルヴァルトは、会員になってもアカデミーに対し、論調を軟化させるようなことはなかった。1867年、彼はアカデミー付属音楽学校の作曲科の教授に選ばれた。反対意見が多くて票が真二つに別れたが、アカデミー総裁のオスカル王子（国王カール15世の弟：後の国王オスカル2世）の1票により、彼の就任が決まったのであった。

創作に関しては、『ゴルコンダの女王』より以後、もはや大規模な作品が書かれることはなくなった。既に70才に達しようとしているこの時期、彼が書いた作品には、1864年にシェークスピア生誕300周年を記念してのカンタータ（全6楽章）、1866年6月15日にストックホルムで開かれた産業博覧会の為のカンタータ（全3楽章）がある。後者はオスカル王子が作詞したものだが、曲の中には『ロッホレーヴンの城』からの使い回しがある。

ベルヴァルトが最後に取り組んだ大仕事は、ヨハン・クリスティアン・ヘフナー<sup>(31)</sup>が1820年に発表した賛美歌集の編曲・改訂であった。特に信仰心が厚かった訳ではないが、彼は教会音楽を、国民が最も頻繁に音楽に触れる機会として重視した。1867年3月にこの仕事にかかる時、5月に彼は、外国のルター派教会音楽について調査する為の旅行費用の援助を国王に申請し、彼のこの種の申請には珍しく、直ちに裁可されている。旅費を受け取ると、7月から8月にかけて彼はベルリン、ドレスデン、ウィッテンベルク等を回り、資料を調べ、現地の音楽家の意見を聴いたりしてきた。これが彼の最後の外国行きとなった。帰国してから翌年3月までに、彼は59曲の編曲を完成させた。しかし、更に仕事を続けているうちに、3月末に彼は肺炎を患い、4月2日から3日にかけての夜中に亡くなった。14日にストックホルムのドイツ教会で行われた葬儀で演奏された曲には、彼の交響曲ト短調（第1番）の第2楽章と、彼が手掛けた賛美歌2曲が含まれていた。

## 6. 結 語

ベルヴァルトが死んだ際、残された財産は殆どなく、借金は相当の額に登っていた。葬儀の費用は、友人達のカンパと、オスカル王子の弔慰金によって賄われたのであった。音楽アカデミーでは、遺族を助ける為に、残された楽譜を買い上げて出版するという企画が持ち上がったが、国王からの資金援助を加えても、交響曲3曲と管弦楽曲2曲を出版するのがやっとであった。未亡人マティルデに国庫から年金を支給するという案は、議会において、彼のアカデミーおける短い活動が国庫からの補助に値せず、その他の活動も社会的に重要でないという理由で、否決されてしまった<sup>(32)</sup>。

ベルヴァルトへの評価の見直しは、遅々としていたが、着実に進んでいった。ノルマンを始

めとする、彼の年下の友人達は、彼の作品を意欲的に紹介していった。交響曲変ホ長調（第4番）の初演は1878年に行われ、1898年オペラ座の大改築後の柿落としには、『エストレラ・デ・ソリア』が取り上げられた。交響曲ハ長調（第3番）の初演は1905年、そしてスコアの散逸していた交響曲ニ長調（第2番）は、1914年にエルベリイ（E. Ellberg）により復元され、初演されている。20世紀になると、彼と直接接したことのない世代の音楽家達、フーゴ・アルヴェーン（Hugo Alfvén）<sup>(33)</sup> やヴィルヘルム・ステンハンマル（Vilhelm Stenhammar）<sup>(34)</sup> 等にとって、ベルヴァルトは極めて大きな目標、乗り越えるべき壁として立ち現れた。特に後世、彼と並ぶ大作曲家と見なされているステンハンマルは、ベルヴァルトを高く評価していた。1920年にアドルフ・ヒルマン（Adolf Hillman）によって書かれた、ベルヴァルトに関する最初のまとまった伝記は、彼に対する再認識を更に進めた。1946年のベルヴァルト生誕150周年、1968年の没後100周年記念の催しは、スウェーデン音楽界挙げての行事となっている。

彼の作品総数は、若い頃『ムシカリスク・シュルナール』に載せたピアノ、声楽の小品も加えると、約120曲とされているが、当人も公開演奏しようとしなかった試作的な作品を除いて、また未完成作品や散逸作品も除外すると、その半分程度になると思われる。その中心をなすものは、器楽曲では4曲の交響曲、5曲の協奏曲及びその同類、9曲のその他の管弦楽曲、室内楽には3曲の二重奏、5曲の三重奏、弦と管合わせて4曲の四重奏、2曲の五重奏、1曲の七重奏となる。声楽曲では2曲のオペラ、3曲のオペレッタ、8曲のカンタータ、といったところであろう。このうち、交響曲とオペラは、なかなか発表の機会に恵まれなかったし、カンタータを含む声楽曲の中でも、イベント用の音楽として依頼されたものは、再演されることは余りなく、すぐに忘れられてしまうことが多い。生前にベルヴァルトの曲として人々に親しまれていたのは、室内楽曲と、複数回の演奏機会を得られた、管弦楽曲と声楽曲の一部、ということになる。

いわゆる「不遇な」音楽家の多くと同じく、ベルヴァルトの場合も、作品の演奏機会が乏しかったことが、一般聴衆の支持を得られなかった大きな理由であった。そして、演奏機会が得られなかった原因の、少なくとも一つは、彼が宮廷楽団を辞めて以後、組織としての楽壇から離れて、在野の作曲家の立場を選んだことにあった。音楽以外の領域で余りに活躍したことも、彼を音楽界の中心から遠ざけたかもしれない。国王や王族まで含めた知人・友人達の私的な支持も、アカデミーやオペラ座といった公的な機関による疎外を、埋め合わせることはできなかったのである。しかし、仮に彼が宮廷楽団に留まっていたならば、或いは音楽に係わる職を得ることを優先していたならば、それは彼から作曲の時間と、外国滞在の機会を奪っていた可能性がある。また、彼の創造精神に常に刺激を与えていた、人々との交流や社会への関心が維持できたかどうかとも疑わしい。

様々な社会の分野において、また特に若い世代の間に、多くの友人を獲得できたことは、彼の秀れた所であるとともに、彼にとって大きなメリットになった。彼の人は必ずしも円満ではなかったし、しばしば他人と衝突もした。しかし、絶交したファン・ボームと、疎遠になっ

たクリスティナ・ニルソンは別として、その他の多数の後輩音楽家達、それに様々な職業のアマチュア音楽家と音楽ファンを、引きつける力を彼は持っていた。生前の彼の音楽活動を支えたのは勿論、死後に彼の評価を高めるべく努力をしたのも、この人々であった。甚だしく時間を要したとは言え、楽壇や権威筋によってではなく、ファンによって音楽が認められる前例を開いたことは、ベルヴァルトの功績及び名誉に数えて良いだろう。

スウェーデン音楽史において、作曲家ベルヴァルトの先駆性と重要性は、今や十分に認識されていると言って良いだろうが、彼の個人的生涯、彼の音楽の特性、彼の影響力等に関して、なお解明すべきことは多い。楽曲分析のできない筆者には、彼の音楽をスウェーデン音楽史の中で、或いは当時のヨーロッパ音楽の全体図の中で、精密に位置付けることは到底できないが、彼の創作活動、文筆活動、経済活動等を、当時のスウェーデンの文化・経済・政治の発展の中に位置付けること、そしてスウェーデンの歴史における音楽活動の意義について、更に究明することを、今後の課題としていることを付記しておく。

(本学教授＝歴史学担当)

### <註>

- (1) Robert Layton 著の“*Berwald*”(Stockholm, 1936)では、この曲名の後半が‘um heiligen Gnade’ (聖なる恩寵を求める)になっている。しかし他の資料では皆、‘am heiligen Grabe’である。
- (2) この曲が1842年6月18日に完成したことは、ベルヴァルト自身のメモとマティルダの日記から、ほぼ確実とされている。Franz och Mathilda Berwald, *Brev och Dagboksblad*. Stockholm 1955. p. 95, p. 148.
- (3) 1910年、新設されたベルヴァルト財団 (Berwaldstiftelsen) は、この曲のスコアの発見に賞金を提供することにしたが、現在なお見つかっていない。本文の通り、1914年にエルベリィがスケッチから復元した版が初演されたが、1968年カステグレン (N. Castegren) が、より綿密な考証に基づいた新しい復元版を発表し、現在ではこちらが主に演奏されている。Jan Lennart Höglund, *Franz Berwald*. Jönköping 1995. pp. 92–94.
- (4) Johanna Maria (Jenny) Lind (1820–1887: 1852年以降 Lind-Goldschmidt)。周知の通り、「スウェーデンのナイチンゲール」と称えられた、スウェーデンが生んだ、当時最高のソプラノ歌手の一人。ベルヴァルトへの協力は、1843年と1847年だけで終わってしまう。1849年以後、彼女は舞台上で役を演じることを止めてしまうが、演奏会形式では1883年まで歌っている。Cf. Nils-Olof Franzén, *Jenny Lind*. Stockholm 1982.
- (5) 当時 (1845年)、中学校教員の年収は平均約1000リクスダレル。なお、1776–1855年の貨幣制度では、1リクスダレル (riksdaler) = 48シリング (skilling), 1シリング = 12ルンステュッケン (runstycken)。1855年以後1リクスダレル = 100エーレ (öre)。1873年リクスダレルをクローナ (krona) に呼称変更。Cf. Lars O Lagerqvist, Ernst Nathorst-Böös, *Vad kostade det ? Borås* 1999.
- (6) Ingvar Andersson, *Franz Berwald*. Stockholm 1970. p. 142.
- (7) Gustaf Carl Fredrik Löwenhielm (1771–1856)。軍人・政治家・外交官。ナポレオン戦争に

- 従軍、1812—1818年オペラ座総監督、1815年ウィーン会議に参加。1818—1856年パリ駐在大使。大使在任中も、本国の政治や文化活動にしばしば関与。
- (8) 1848年にロストホルン男爵家でベルヴァルトと相客だったヴォルケ (Ch. Wolke) の残した資料によると、ベルヴァルトはその後ロストホルン一家に非常に嫌悪されるようになっていて、以後全く顔出しができなくなったとされている。しかし、ヴォルケの信頼性には問題があり、文字通りには受け取れない。1851年に作られたピアノ三重奏へ短調 (第2番) は、1852年にロストホルン男爵に献呈されているのである。Höglund, op. cit., p. 53. Andersson, op. cit., p. 222.
- (9) ヤルマルは技術者を職業として選んだが、アマチュア音楽家であり、作曲もしている。彼の娘アストリド (Astrid Maria Beatrice : 1886—1982) は、ピアノ奏者及び音楽教育者として業績がある。
- (10) 当時、スレスヴィ公国との合同を押し進めようとするデンマークと、それを阻止しようとする、プロイセン、オーストリアを含むドイツ諸国との間に対立が生じていて、スウェーデン政府はデンマークを支持していたことから、ウィーンにおいてもスウェーデン人に対する風当たりは、かなり厳しくなっていた。Höglund. op. cit. p. 53.
- (11) Johan Erik Nordblom (1788—1848)。教育者で声楽家。J.C.F. ヘフナーの弟子で、その没後跡を継いでウプサラ大学音楽監督。
- (12) Carl Hochschild (1831—1898)。ヨーロッパ各国の公使・大使を歴任した後、1880—1885年外相。スウェーデン・ノルウェー間の紛争に関しての協調主義者として知られる。
- (13) Jacob Axel Josephson (1818—1880)。作曲家、指揮者。ウプサラ大学卒業後、イエニー・リンドの後援を得て国外に留学。1847年ハーモニー協会指揮者、1849年ウプサラ大学音楽監督。ベルヴァルトの死後、賛美歌の編曲・改訂の仕事を引き継いだ。
- (14) Jacopo Foroni (1825—1858)。イタリア出身の作曲家、指揮者。1849年スウェーデンの宮廷楽長に就任。宮廷楽団の技術の向上を実現し、ヴェルディのオペラをスウェーデンに初めて紹介。オペラ作品に『スウェーデン女王クリスティナ (Cristina di Svezia)』等がある。
- (15) Cf. Torbjörn Fogelsberg, *Sandö glasbruk 1750—1928*. Stockholm 1968.
- (16) Oscar Fredrik Bernadotte Byström (1821—1909)。軍人でピアノ奏者、また作曲家、指揮者。軍人としては、1857年に陸軍大尉にまで進んでいる。1866年ベルヴァルトの弟アウグストの跡を継いで、アカデミー付属音楽学校の校長。1872—76年フィンランドのトゥルク市のオーケストラ協会の指揮者。
- (17) Ivar Christian Hallström (1826—1901)。ピアノ奏者、作曲家。ウプサラ大学法学部を卒業。国王オスカル1世の王子グスタフ及びオスカル (後の国王オスカル2世) の音楽仲間。スウェーデンの歴史や伝説に題材を得たオペラを多数作り、19世紀後半のスウェーデンで最も人気のあるオペラ作家であった。
- (18) Per August Ölander (1824—1886)。ヴァイオリン奏者で作曲家。ウプサラ大学在学中ノルドブロムの指導を受け、後にその娘で声楽家のヨハンナ・マリアと結婚。本業は公務員だが演奏家、音楽評論家としても活躍。彼のオペラも、ベルヴァルトの作品よりは多く上演されている。
- (19) Fredrik Vilhelm Ludvig Norman (1831—1885)。作曲家、指揮者。少年時代からピアノと作曲の天才を認められ、父の死後、オスカル1世やイエニー・リンド等の援助を得て教育を受け、作曲家として世に出る。1861年宮廷楽長に就任。ベルヴァルトの死後、その作品の紹介に尽力。
- (20) Hilda Thegerström (1838—1907)。ピアノ奏者、教育者。リストの指導を受け、ワイマルでデビュー。1872—1904年、ストックホルム音楽大学のピアノ科教員。
- (21) ベルヴァルトは、1857年に完成したピアノ五重奏イ長調をリストに献呈している。1858年7月、ハンス・フォン・ビューロウから知らされた話としてベルヴァルトが書いているところによれば、リストはこの献呈に感謝し、また、ヒルダ・テゲルストレームに献呈されたピアノ五重奏ハ短調のピアノのパートを、自ら弾いたとされている。Andersson, op. cit., p. 221—222.
- (22) 1856年6月28日付のベルヴァルトのファン・ボーム宛ての手紙には、絶交の理由として、ヒル

- グ・テゲルストレームに対する公正を欠いた扱いの他に、貧しい家庭出身の弟子から高額のレストラン料を取り立てたこと等を上げている。Hillman, op. cit., p. 83—88.
- (23) サンデーのガラス工場は、1909年に一度経営が破綻し、再建されたが1921年に再び破綻し、1929年には整理を終えて閉鎖している。Fogelberg, op. cit., p. 279—296.
- (24) ベルヴァルトが去った後の1862年、サンデーの製材工場とビール工場は火災で焼失し、以後再建されなかった。Ibid. p. 41.
- (25) Höglund, op. cit., p. 71—72.
- (26) Francesco Antonio Baldassare Uttini (1723—1795)。イタリア出身の作曲家、指揮者。旅回りの歌劇一座の作曲家として各国を回り、1755年スウェーデンを初訪問。1767年宮廷楽長に抜擢。自作を含む多くのオペラをスウェーデンに紹介。1788年引退。
- (27) ベルヴァルト作曲の『ゴルコンダの女王』が初演されたのは、1968年4月3日、ストックホルムのオペラ座において、彼の没後百周年の記念行事の一環としてであった。Jubellboken operan 200 år. Lund 1973. p. 67—68.
- (28) Kristina Nilsson (1843—1921 : 1887年以降 Nilsson de Casa Miranda)。声楽家。パリとロンドンを中心に活躍を続けた彼女が、公演の為スウェーデンを訪れたのは、1876年、1881年、1885年である。1885年の来訪の際、9月23日の夜、約5万人のファンが彼女の泊まっているホテルの前に押し寄せた為、混乱の末12人が死亡し、40人以上が負傷するという大惨事が起こっている。Cf. Beyron Carlsson, *Kristina Nilsson*. Stockholm 1921.
- なお、イエニー・リンドとクリスティナ・ニルソンの間に、直接の交渉があった痕跡はない。若い世代の歌手に対して容赦のなかったイエニーは、クリスティナを部分的には評価しつつも、全体としては手厳しい酷評を浴びせている。Franzen, op.cit., p. 284.
- (29) 本稿第1部の冒頭(東京音楽大学研究紀要第25集23頁)において、筆者は「音楽アカデミーにさえ、死の前年によく入れたのであった。」と書いたが、ベルヴァルトがアカデミーに入ったのは1864年(死の4年前)であり、1867年(死の前年)に得たのは、アカデミーの作曲教授の座であった。ここに訂正する。
- (30) Höglund, op. cit., p. 73—74.
- (31) Johan Christian Friedrich Haeffner (1759—1833)。ドイツ出身の声楽家、指揮者、作曲家。1781年スウェーデンに移住し、声楽教師、指揮者等を勤め、1792年宮廷楽長。1808年宮廷楽団を退き、ウプサラ大学音楽監督に就任。1820年賛美歌集を刊行。オペラ作品もある。
- (32) Andersson, op. cit., p. 279.
- (33) Hugo Emil Alfvén (1872—1960)。ヴァイオリン奏者、作曲家。1910—1939年ウプサラ大学音楽監督。4曲の交響曲と多数の声楽曲の創作で知られるが、ダーラナ地方の音楽活動への貢献も大きい。
- (34) Karl Wilhelm Eugen Stenhammar (1871—1927)。ピアノ奏者、作曲家、指揮者。ほぼ独学でピアノと作曲を習得。1897年から指揮活動を始め、イエテボリ交響楽団、オペラ座等で指揮に従事。シベリウス、ニルセン、リヒャルト・シュトラウス、マーラー等をスウェーデンに広く紹介した。生前は、作曲よりは演奏と指揮の方で名が高かったが、今ではスウェーデンで最高の作曲家の一人に数えられている。

\* 注の中の人物紹介に関する項目には、特に記載したもの以外では、*Svensk uppslagsbok* (Stockholm 1945—1955), *National encyklopedin* (Höganäs 1989—1996), *The New Grove Dictionary of Music and Musicians* (2nd ed. 2001) を専ら参考にした。